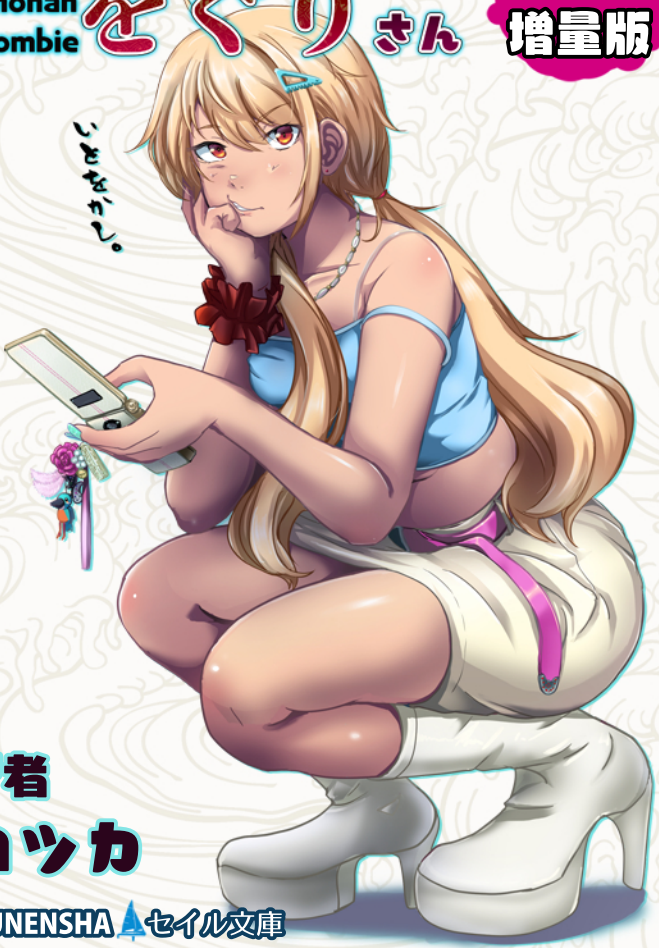
湘南ゾンビのをぐりさん

Shonan Zombie

試し読み増量版



著者
コッカ

SHOUNENSHA セイル文庫

湘南ゾンビのをぐりさん

Shonan Zombie

登場人物

小栗こはぎ (おぐり こはぎ)

自称ゾンビのJCギャル。中学一年の頃は明るくクラスの人気者だったが、突如無表情のメンヘラ・ギャル阿弥陀仏に変貌。リストカット事件以降学校で孤立しているが、感覚が鈍くなった本人はさほど気にしていない。

藤沢てる (ふじさわ てる)

600年前に『をぐり（小栗判官）』という作品を執筆した室町人。戒名は長照院寿佛房。この世の役目を終え、はるか昔に極楽往生していたが、こはぎの血によって現代に蘇ってしまった。中世と現代のギャップに戸惑う中、令和の藤沢でなんとか生きることにする。

横山恵美由 (よこやま えみゆ)

自称クラスのスクールカースト最上位。こはぎの友人。ファッション好きで承認欲求が強いが、運動が大の苦手。こはぎを人間に戻すために藤沢市内を振り回される事になる。

御厨伊奈帆 (みくりや いなほ)

恵美由の知人。地域にある神社の娘で、大学卒業を機に神職として働いている。史学専攻だったので少しだけ日本史や民俗学の知識がある。

湘南ゾンビのをぐりさん

Shonan Zombie

コツカ

セイル文庫

湘南ゾンビのをぐりさん　目次之事

プロローグ　四
第一段　まぢぴえん。　一三
第二段　遊行寺の水琴窟　二二
第三段　大庭神社　四三
第四段　ギャルに説法　五八
第五段　小粟判官　七九
第六段　聖地巡礼　一二七
第七段　いい湯だな。　一六四
第八段　時をかけるゾンビ　一八〇
第九段　てるのそら寝　二〇四
第一〇段　大庭御厨の景観　二三三
第一一段　うたかた入浴剤　二四五
第一二段　失本心故　二六二
第一三段　えいさらえい　二八二
エピローグ　門付唄　三三六

令和五年某日　書之了　長生比丘尼

この物語は、中近世にかけて流行した口承文芸・説経節『小栗判官照手姫』を題材に虚実織り交ぜ大幅に脚色したものであり、一切の学術的価値は無い。

プロローグ　湘南ゾンビのをぐりさん

「うち、ゾンビになったかも」

四月も半ばを過ぎ、新年度の緊張もほぐれ始めた中学二年の朝だった。二週間遅れで登校してきた小栗さんの意味不明な発言に、クラスは困惑した。

小栗こはぎ。足元をルーズソックスで固め、丈を短くしたスカートからは、薄く焼かれた小麦色の肌を覗かせている。ウェーブのかかったおさげは今時珍しい黄金色のヘアカラー。まるで、九〇年代の渋谷からタイムスリップしてきたようなファッション、いわゆるテンション高い「コギャル」な彼女に似つかわしくない発言だったからである。

――「ゾンビ」ってなんぞ???

こはぎの発言は、さっきまで教室の一角で和気あいあいと話をしていた女子グループの中心人物に投げかけられたものだ。

「あー。なんか話あるみたいだから、ちょっと外すねー」

「横山さん、やめといたら？　小栗さん、なんだか少し見ないうちにヤバいオーラ出てるよ？」

「半月遅れの新学期でまだ本調子じゃないんっしょー」

横山恵美由（よこやまえみゆ）は、ファッションセンスに人一倍こだわりがある。だから令和の世に敢えてギャルを貫くこはぎを一目おいていた。気味悪がるクラスメイトの制止を諌め、その輪を出る。甘ったるいバニラの芳香を漂わせたクラスの女王蜂は、鼻歌混じりにプラチナブロンドに染めた髪を揺らして一人、学校に蘇ったばかりでけだるそうな「ゾンビ」の前に立った。

「おはぎ久しぶり〜。ねぇ、今『ゾンビ』って言った？」

「うん。ゾンビになっちゃったみたいなの」

「マ？」

「マジだよ」

「草。おはぎウケるｗｗｗ」

恵美由は、ケタケタとわざとらしく手をたたいて笑った。勿論、本心で面白がってるわけではない。こはぎが病み上がりでふざけているのだろうと思い、差し障りのない反応で観測気球を上げてみたのだ。マスクの中で恵美由の口元はひきつった。

（こいつ、まぢで何を言ってるんだ……？）

おはぎ、もとい、こはぎは、新学期初日から学校を病欠。ＳＮＳの更新すら止まってしまっていた。普通なら登校拒否を疑う所だが、前年度はスクールカースト上位で学生生活は充実していた部類。誰も彼女がネガティブになるような要因に思い当たる節は無かった。

「……小栗はきっと、『あの病気』にかかってしまったんじゃないか？」

むしろ二〇二三年という時代柄、こちらの線の方に合点が行った。中学一年生のときから彼女の事を知っているクラスメイトたちは、新学期に誰も座っていない席を見て、

（平成に生きている時代遅れのギャルでも病気になるんだな）

（きっとスマホも触れないほど重症化してしまったのだろう）

と思い、そっとしていた。

しかしながら四月早々に半月も休んでいれば、どんな陽キャでも存在を忘れ去られ、新クラスの主導権を失うのは必至である。恵美由はだからこそ、コイツはぼっちを避けるために突拍子もない話題でみんなの気を引こうとしているのだろう、と分析したのだった。

「おはぎ、コロナ明けだからってウケ狙ってるっしょ？　承認欲求ってやつ？」

「ウケなんて狙ってねーし。本当だし」

こはぎは、ぷいとそっぽを向いた。マスク越しでも隠し消ることのできない不満をあらわにしている。

「マ？　じゃあしょーこ。証拠見せてよ～」

恵美由の小馬鹿にした目をにらみながら、ギャルは渋々、ゾンビである「証拠」を列挙してみることにした。

「……タンスに足の小指をぶつけたけどイタくない」

「ずいぶん丈夫な小指だなw」

「……ネイル割れたのに痛みを感じない」
「栄養、足りてないんじゃね……？」
「ご飯毎食三杯は食べてるのに、いくら食べてもおなかがペコペコする」
「そんな食って太らねーの？　うらやましいなぁ……」
こいつ、中二病の誇大妄想でもしているのか？「証拠」と言うにはあまりに微妙すぎて、恵美由はあきれかえった。
「まちわかんない……感覚がすごく鈍くなってる。ぅちがぅちじゃなくなっちゃった……」
こはぎはだるそうに、机に突っ伏した。あるいは、マグロにでもなったのか？
「……つーか、おはぎさ。それってフツーにコロナの後遺症じゃね？」
味覚が鈍くなったり、強い倦怠感に襲われたりするのは後遺症として有名な症状、というのは授業で習った。他の罹患した生徒も復帰したあとの不調をしばらく訴えていたし、別に彼女に限った事例ではない。
「だから、コロナじゃねーし。何度も検査したけど陰性だったんだってば」
「じゃあ、新型の『なんとか株』なんじゃね？」

この数年でウイルスは数えきれないほど変異をしているが、海外から新種が検査をすり抜けて日本に上陸したのだろうか。てかそうだとしたらまじヤバ。恵美由はさりげなくマスクのズレを直した。

「エミューだから相談したのに。なんで信じてくれないの。まぢむり……」

こはぎはため息をつくと、シュシュの巻かれた手首の辺りをぼりぼり掻き始める。恵美由は「コイツ何やってんだ」とあきれたが、フリルの隙間からちらりと赤黒い何かを目にした。切り傷の痕だ。

「あ……」

リストカット――。こいつ、ぼっちをこじらせてメンヘラになってしまったんだ、と思った。これまでの言動から、自分らとは異質なものを感じ、「うっわ、萎えるわー」と目をそらしてしまった。こんなヤツに構った自分がバカだった。さっさと元の女子グループに戻らねば。

しかしてその瞬間、視界の端でシュシュが真っ赤に染まった。

「……は？」

飛沫が引きつった頬をつたい、じわりと口の中に鉄の味が広がる。

「証拠。こんなにどばどば血が出ても全然痛くないんだけど。……おかしくね？」
唖然とする恵美由を前に、こはぎは真顔のまま。
「ちゃんと見てくれたよね。血、止めるね」
「は？　はぁ!!?」
手首から出していた噴水がすっと不自然に止まった。これは何かの手品か……？　それはまるで水の出ていた蛇口を閉めるように、自分の出血をコントロールしているのだ。
「きゃあああああ!!!?」
背後で、誰かの悲鳴があがった。
氷のように冷静なこはぎとは対照的に、突如朝の教室の一角が真っ赤に染まったことでクラスは騒然となった。
「血？　あれ、血じゃね？　小栗がケガしたのか？」
「いや、なんかおかしい。あんなに床が赤くなってるのにアイツ表情一つ変わってない……」
「み……みんな……。小栗が鼻血出しちゃった！」
「鼻血って……？　鼻というより手から出血したみたいだけど……」

「手からだってでるんだよォ!!」

「……それって、鼻血って言わなくね?」

恵美由は血だらけの手首をつかんで、教室から連れ出す。ちょうどチャイムと共に教室に入ってきた担任に、震える声で、

「先生! 小栗さんを保健室に連れて行きまぁす!」

とすれ違いざまに叫んで逃げた。

思わず、素のクソ真面目な敬語が口から出てしまったが、そんな事はどうでも良い。横山恵美由は青ざめながら確信した。

この春、小栗こはぎは人間をやめてしまったのだ。

第一段 まぢぴえん。

この日、こはぎは初めて授業をサボった。

小学生の頃はどんな時も病気せず、コロナ禍でも登校日は全て通い続けた。皆勤賞だけはギャルになる前からのささやかな自慢だった。

それも先日の体調不良で、中学二年で登校記録はストップ。ついには怒りにまかせてトラブルを起こし、授業までフケてしまったのだ。着実に、自分はアウトローへの道を歩んでいる。

昨年亡くなった祖母にも会うたびに得意げに健康ぶりを自慢していた己を思い出し、恥ずかしくなる。天国の彼女に何と言い訳すればいいのだろうか。

「まぢ、ぴえんだし……」

カーテンで仕切られた保健室のベッドの中で、小さくつぶやく。この場合の意味は無念である。

涙目の黄色い「ぴえん」マークを脳内にいくつも浮かべていると、わきの下で「ピー」と電

子音が鳴る。古い電子体温計のアラームである。

「小栗さん、体温何度だったー？」

保健室の先生がカーテン越しに呼びかけてきた。しぶしぶワイシャツの中から白い棒を取り出して液晶表示を見ると数字は無く、「L」の字が点滅している。体温が低すぎて計測できなかったのだ。何度測っても表示は変わらないので、面倒くさくなった彼女はそのまま電源を切った。

「……さんじゅうろくー？」

「36℃ちょうど？　低めね。鼻血による貧血……低血圧かしらねぇ」

先生にはさすがに「ついさっきリストカットして来ました」とは言えないので、シュシュに付着した血は鼻血をぬぐったものだと嘘をついてごまかした。

「大事をとって早退しましょう。とにかくあなたは病み上がりだから無理しちゃだめよ」

「うーす」

またか、と。ここでも自分はコロナだと思われているらしい。小栗はなんでもかんでも子供の異変に流行り病を当てはめる世の中にうんざりした。

セカイをシャットアウトするように白い布団をかぶる。

「時刻は……もうすぐ授業が終わるわね。私は担任の先生に報告しに職員室に行くから、席を外すわ。ゆっくり横になってて」

「……」

布団越しに、一時間目の授業の終わりを告げるチャイムが鳴り、同時にガラガラと引き戸の開閉音もした。先生が出て行ったのだろう。今日は誰もいないけれど、普段保健室を利用している生徒たちはこんな寂しい気分で一日を過ごすのだろうか。

（でも、いったい、ぅちって何なん？）

再び、薄暗い空間の中で手首の傷を眺めた。普通なら縫うほどの大きな切り傷はすでに閉じ、赤黒いかさぶたになっている。

自分を苦しめているこの症状は何なのか、と問われても、出血をコントロールできてしまった自分ですら分からない。痛みも感じず、ひどいケガをしてもすぐに治癒している。めっちゃ体が丈夫になったならそれは良い。

だけど、どうもおかしい。傷の治癒と引き換えに、感覚が鈍くなった。表情が乏しくなり、

笑いたくても笑えず、泣きたくても泣けず、感情自体も縮小していくような気がする。つまり、自分は少しずつ生ける屍と化しつつあるのではないか――という漠然としたイメージが大きくなっていった。

生ける屍。そう、つまりはゾンビである。

ハリウッド映画に出てくるような、銃弾に四肢を吹き飛ばされ、腐敗しながらも蠢き、人肉を喰らう。あの醜い化け物だ。小さい頃タマゾンプライムの配信で何かの作品を観て親の前で泣きじゃくったのを思い出す。

（ゾンビ？　ガキかよ⁉　まぢねーし……。）

こはぎは、頭の中で上映されていた映画のスクリーンを無理やり、破り捨てた。

しかし、原因無くして結果はないのも確かだ。ひとつ思い当たる節があるならば……春休みに行ったあの場所だろうか――。

ぐ～～～。

それを思い出しかけたとき、保健室に地獄の釜が開いたような音が響いた。彼女の胃袋が猛烈に栄養を欲し始めたのである。

（……恥っず）

感覚が鈍っても、体は正直だ。久しぶりに血潮が頭にぼり、頬に熱を感じる。もしも授業中、教室で鳴ろうものなら、一年は「妖怪腹減りギャル」とか言われてバカにされるような爆音だっただろう。しかし幸いなことに、ここには自分しかいない。ラッキーと安堵し寝返りを打つ。

そんなときだった。

「……おはぎ、屁こいた？」

「!!?」

目をかっと見開いて、布団から顔を出すと、カーテンの布越しに一人分のシルエット。隙間からにゅっと顔が出てきて、恵美由が現れた。こいつ、いつの間に……!?

「こいてねーし!!!　腹の音だし!!!」

恵美由はマスクを外し、すんすん、と鼻を鳴らす。

「かぐな!!」

「朝からあんたの返り血を浴びた身にもなって欲しいっつーの。メイクし直しだわ、洗っても鉄っぽい臭いが残るわで超サイアク。死ねょマジでー」

ほら、荷物持ってきたよ、とベッドの上にスクールバッグがぼんと置かれる。
「アンタ、スマホの電源切ってないでしょ。中でバイブ鳴ってたけど？」
「ん～？」
スマホは手元にあるので何のことかは分からなかったが、こはぎはバッグの中に弁当がある事を思い出した。
「エミューGJ……！」
布団から体を起こす。膝上に置いた鞄のチャックを勢いよく開け、一足早いランチタイムを始めた。
「はむっはむはむ……！」
「うっわ、早弁かよ」
「だから、死ぬほどおナカがペコるんだってば」
恵美由は、あー、そんな事言ってたな、と思い出したが、同時に目の前の友人の食事にドン引きした。確実に喉がつまるぞ、と思うようなこぶし大のおにぎりが、もりもりとまるごと小栗こはぎの口の中に飲み込まれていく。

「宮脇（担任）には、あんたが鼻血出しながらトマトジュースこぼしたって事にしといたんだけどさー……」

「ごくごくごく……むちゃっ、バリバリっ!!　ぐちゃぐちゃ!!!」

「……」

その光景は、「食べる」のではなく、「貪る」と表現するべきだろう。同じ大食いでもそこに元フードファイターのギャル○根のような大食を楽しむ余裕は無い。薄暗いカーテンの中で赤い眼がぎらぎらと輝く。まるで、何十日も飲まず食わずの漂流者がやっとごちそうにありついた時のような殺気と、生への渇望に満ちていた。

「……おえッ」

こいつ、弁当箱や自分の腕まで食べるんじゃないだろうか。おぞましき友人の捕食シーンに耐えられず、すぐ隣で風に揺らいでいたカーテンを手繰り寄せ、自分の目を覆ってしまった。

「ふぅ……生き返った」

恵美由が目を隠した一瞬で、弁当箱は役目を終えていた。友人の胃袋はしばしの欲求を満たしたのか、化け物から人間の顔に戻っている。恐るべき饗応の時間が思いのほか早く終わった

事に彼女は胸をなでおろした。
「アタシ、今日の昼飯食べられそうにないわー」
「じゃあ、ちょうだい」
「いいよイイよー……いや、よくねぇよ!!」
がんっ！　と思わずベッドの白いフレームをたたく。
「エミュー、怒ってる?」
「あったり前だろこのメンヘラ女!!!」
久しぶりの登校から半日も経ってねぇんだぞ！　恵美由はこはぎの行動にドン引きだった。
同時に中学生デビュー以来、クラスでは陽キャでちょっと不真面目なぶりっ子を演じているのに、小学生時代に棄てた陰キャメガネの真面目ちゃんが久しぶりに出てきてしまった自分への嫌気もあったが。
「心配してスルーしてやってたけど、アンタ二週間以上ＤＭも既読無視してたでしょ!!　アタシ、なんかした!?　彼ピッピとケンカした腹いせ!?」
「スマホは高熱で見る余裕なかったってゆーか……。いや、そもそも彼ピなんていねーけど…

…？」

「とにかく、あんたがキ〇ガイムーブをとりつづけたら、せっかくクラスで上手くやってたアタシの立場も危うくなるんだよ！　どーすんだよ！　アタシまでクラスの陰キャ共にイタい女扱いされたら‼」

「……ごめん」

こはぎは手を合わせ、ジャージ姿で狼狽する友を拝んだ。よく考えてみたら彼女は朝っぱらから自分の血を浴びて着替える羽目になったのだ。恐らく白いシャツは、染みになってしまったかもしれない。本能のままに己を満たした自分を恥じた。

「ただでさえ友達が作りにくい時代なんだから。正直に話してよ」

「そうだね。エミューなら信じてくれると思う……」

これ以上、彼女の立場を悪くするわけにはいけない。小栗こはぎは、偽りなく、春の彼岸に起きた出来事を話す事にした。

第二段　遊行寺の水琴窟

三月の春の彼岸は、ちょうど、こはぎの祖母の一周忌でもあった。

「なむあみだぶなむあみだぶなむあみだぶ……」

その年の桜の開花は、例年より十日ほど早かったが、天気には恵まれなかった。春分の中日を過ぎた花曇りの空の元、満開のソメイヨシノが咲く菩提寺の墓地に僧侶の「南無阿弥陀仏」の読経が響きわたる。

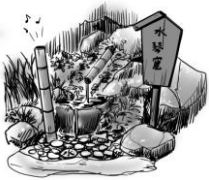
墓前に組まれた祭壇の前で僧侶が真剣に故人の冥福を祈っているその背後、僧侶と共に六字名号を唱える両親に挟まれて不満そうに虚空を見上げるギャルの姿があった。

ギャル　in　寺。こはぎは、完全に場違いな空間に居た。

「がしゃくしょぞうしょあくごう、かいゆうむしとんじんち……」

ちーんちんちんちんちちちちちち……。

まるで音楽を聴いているようだった。鉢をたたく音は思いのほかリズミカルで、なんだか一



種のラップのように聞こえなくもない。墓石に供えられた線香の鼻にしみるような匂いも手伝って、変なトランス状態になりつつあるのか、頭がおかしくなりそうだ。

「こはぎ、焼香して」

ぼんやりしているうちに先に焼香を済ませた母に肩をたたかれ、急いで前を向く。経を読み終え、自分の姿を見て不思議な顔をしているお坊さんに会釈し、教えられた通りにおぼつかない手つきで置かれた台に香を押しいただいた。

そもそもこはぎは、死後の世界だとか心霊的なものを信じていなかった。目の前で進行していた儀式の意味は理解できないし、意義があるとは思えないのだ。少なくとも今、体を締め付けている黒の喪服は地味でダサい。

（もしも運悪くこんな格好で知ってるヤツと鉢合わせしたらどーしよ……）

出来る事なら、どさくさに紛れてこの場から逃げたい。だが、実行しなかったのは現在この墓所に参列している親族が自分と両親の三人しかいなかったからだ。

「なーむあみだぶ、なーむあみだぶ、なーむあみだー……」

（本当なら、この場所は親戚のみんなでにぎやかなんだろうな……）

本来故人の一周忌は親族が集まって執り行う重要な行事であるのだが、この時節柄人を集めるわけにもいかない。喪主（父）の希望で、法要の形態は、こはぎですら「こんなに大きなお寺でやるにはショボいな」と感じられるほど不自然で質素なものになった。

祖母は生前、檀家として信仰も厚かったらしい。多くの人を招いて広い本堂で成大に行うべきものだったろうに。信仰心の無い自分でも誇らしく思えるような荘厳な場になったかもしれないのに。

さすがに祖母がかわいそうで、こはぎは渋々この場所に居る。仏具の音色こそ響いても、心は曇り空の凪いだ海を眺めているように、自分の心は現世ともあの世ともいえない、むなしく、閑かな場所にいるようだった。

「もう、かしこまらなくていいぞ」

父に肩をたたかれてはっと我に返ったとき、こはぎのいた空間はこの世に戻っていた。法事はつつがなく終わったらしい。

ここに来る前は、もしかしたら祖母の魂がこの世に帰ってきて、何かのサインでもくれるん

じゃないかとも思った。が、当然そんな事はなかった。
「何も起きなかったね」
「起きなかったって何が？」
「んーと、心霊現象？」
やっぱりオカルト番組なんてヤラセなのだな、と少しがっかりする。
「あったら怖いでしょ。お義母さん、成仏できてないかもしれないじゃない」
母は不安を紛らわせるためか、無意識に手で念珠（数珠）をなでている。
「ママ、怖いの？」
「怖いっていうか、あの時は……」
一呼吸置いて、母は、花の飾られた墓石を見る。
「コロナって怖いわね。容態が急変してあまり別れの時間も無かったし。ここまで来ても色々後悔はあるから」
「気にしすぎだ。お前は充分おふくろに尽くしてくれたよ。きっと先に行った親父と一緒に俺たちを見守ってくれているさ」

「そういえば、おじいちゃんもあの世に居るんだ」
「そう、お前がまだ赤ん坊のときに亡くなったから記憶にないだろうけどね」
「ふーん……」
「二人とも、元気な時は、毎年このお寺の踊り念仏に参加するのが楽しみだったわよね」
両親は、自分の身近で知らない人の記憶に想いをはせていた。生きていたら、今の自分の姿を見てどう思うんだろうか……。
「ぶっちゃけ怒られそうで怖いな」と思った時、遠くでお坊さんがこちらに一礼をする。こちらの話が終わるのを待ってくれていたのだ。父は「いけない」と、急いでその方へ向かった。
「わたしも行くわ」
母が先方に聞こえないように小声で耳うちをする。
「こはぎ、あんたは興味ないでしょ？　お坊さんにお布施を渡したりしないといけないから、少し時間をつぶしてて」
「うぃーす」
堅苦しさから解放されて願ったりかなったりだった。こはぎは背伸びをし、あくびをしなが

ら線香くさい空間から一人、抜け出した。

＊

ソメイヨシノが咲く檀家用の墓地から本堂の前に出ると、大きな銀杏の木がそびえたち、広く、白い砂利の敷かれた境内が広がっている。

（おーえす！　おーえす！）

伽藍の隣には寺の経営している男子校があり、元気で汗臭い声が飛んでくる。どうやら春休みでも野球部が練習をしているらしい。ご苦労なことだ。

参拝者用に水の出ている手水鉢のすぐそばの植え込みを見上げると、剃髪し、手を合わせた眉毛の太いおっさんの銅像がこちらを見下ろしていた。

（歴史の教科書で見た気がするけど……誰だっけ？　ま、いっか）

像の隣の標柱には「宗祖　一遍上人像」と書かれていた。

こはぎが今いるお寺。ここは、神奈川県藤沢市にある時宗の総本山、藤沢山無量光院清浄光

寺。世に「遊行寺」として知られる、七百年ほどの歴史を持つ由緒ある寺院であった。しかしながら、全くの無知である彼女には「でっかいお寺なのに全然観光客いないじゃーん」といったほどの認識しかないのが悲しい所であるが。

特に境内を観光する気分でも無かったので、地面に敷かれた白い砂利道をざりざりと音を立てて桜の花が見られる駐車場に向かった。とはいえ、曇天の墨で染められた桜はなんとも物悲しい。すぐ飽きて駐車スペースの片隅、古い石柱のある見晴らしの良い場所にたどり着くと、気まぐれに外を覗いてみた。寺を出てすぐ、山を切り開いた坂道をトラックなどの様々な車両がせわしなく行きかっている。いわゆる「遊行寺坂」だ。正月二日・三日、箱根駅伝のテレビ中継でランナーたちがこの場所を駆け上る姿を観た人は多いかもしれない。この道は、江戸時代の東海道で、現在の国道一号線。昔は江戸、今は都心へと向かう日本の動脈である。

「良かった〜、ぅちの知ってる藤沢だわ」

先ほどまで非日常的な空間に身を置いていたこはぎは、見覚えのある道を見て、自分がちゃんと現実の世界にいるのだと再認識した。

思えばこの数年、特に一年前後は、祖母の看病からの死、葬儀の準備……と家の中が慌ただ

しかった。もちろん実務にあたっていたのは両親。幼い自分はほとんど見ているだけだったけれど、何もできない無力感と焦燥感の中で過ごしてきたのを覚えている。

こはぎが日本人形のように黒く艶のある髪の毛にパーマをかけ、一九九〇年代のファッション誌に出てくるようなド派手な金髪に染めはじめたのも、その辺りだった。ある意味、家族に「自分を見て欲しい」という無意識のエゴがギャルファッションに興味を持つきっかけでもあったかもしれない。

だから、おばあちゃんには申し訳ないけど儀式を終えたことで開放感があった。「この一周忌が終われば、ひと段落だよ」と両親に言われていたから。

「これでやっと、終わったんだ……」

こはぎは、金色に染めた髪をやさしくなでた。

からから……ころん。

「ん……？」

そのときだった。彼女の耳に、ささやくような不思議な音色が入ってきたのだ。

本堂で何かしている？　不思議な音に、耳を澄ませて周囲を伺う。

（おーえす！　おーえす！）

とはいえ、境内には変わらず男子校から汗だくの叫びが響いているし、本堂では両親がお坊さんと何か談笑しているのが見えた。気のせいか。

きんかん……ころん。

いや、気のせいじゃない。お堂の奥、さっきまでいた墓地の、さらに奥の方で何か得体の知れない音が奏でられているのだ。おかしい。法要中も、その前にお墓を掃除した時にも、何も聞こえなかったのに。

「何だろう……」

こはぎは退屈ぎみだったのも手伝って変に気になってしまった。魅入られてしまった、と言うべきか。踵を返して本堂脇に入ると、墓石が立ち並ぶ坂道を登り始める。

＊

桜並木と墓石の道を一人てくてくと登りきると、その先に、もう一つ、小さなお寺が姿を現した。

（お寺の中にお寺……？）

大きな寺院に所属する小寺のことを「塔頭（たっちゅう）」と言うのだが、幼いこはぎはそのような言葉を知らない。何も知識も持たずにやってきた少女は、そのお堂の軒下に掲げられた看板（扁額（へんがく））を見て少しだけ驚いた。

「『小栗堂』……？」

その古そうなお堂は、自分の苗字が付けられた建物だった。ただの偶然……だろうか？　それこそ、祖母に訊けば何か知っていたはずなのだが。

からから……、ころん。

深まる謎の中、狭い境内の真ん中で首をかしげてるこはぎに、三たび自分を呼ぶような音色が奏でられた。今度は、「小栗堂」の裏から。丁度、お堂に向かって左脇に小さな門があり、そこから塀と堂の間を人がやっと一人通れるくらいの細い道が奥に伸びている。

「入ってもいいのかな……？　すいませーん」

念のため、声をかけてみるが、誰もいないらしい。お父さんたちの事もあるし、あまり道草は食っていられない。こはぎはさっさと疑問を晴らすために小走りで中へ進んでいった。

路地を抜けたら何があるのか、と思えばそこにはハナモモなどの植物が植えられ、小さな庭園のようになっていた。お寺なので、鎌倉の観光寺院にあるような枯山水などの日本庭園かと思ったが、よく見ると、お地蔵様や、苔むしていつの時代かも分からぬ古い供養塔などの石造物がいくつも置かれている。どうやら、ここも墓地らしい。

その場所には、どうも由緒ある人々が葬られているようで、いくつも色あせた看板がたてられていた。しかし、こはぎは歴女（れきじょ）ではない。せいぜい日本史上の人物などイエヤスやノブナガ程度しか覚えていない彼女には、誰の墓かなど眼中になかった。そもそも今、彼女の感覚は耳

に集中している。

「こんな場所で音の出るものなんてあるん？」

こはぎは金髪をぼりぼりとかいて耳を澄ませる。その時、右耳に「ぴちょん」と小さな音がして、急いで音の主の所へ駆けた。

「あった！」

そこには、「眼洗之池（めあらいのいけ）」という小さな池と、そのそばに謎のオブジェがあった。手水鉢のような水たまりと、玉砂利の地面の上に、忍者が「水遁の術」で呼吸をするような竹筒がにょきっとはえている。不思議な音は、その竹筒から届けられていたのだ。

「……なんぞ、これ？」

見たことのない物体だった。そのオブジェの横にはこれまた風化した立て札があって、うっすらと、何か書いてある。こはぎはそれには興味があったので、何とか解読しようと試みる。

「みず…こと……くつ？」

水琴窟（すいきんくつ）。水を地面の一点にかけると、鉢など地下に埋めた容器に水がしたたり落ち、それがまるで鉄琴をたたくように不思議な音色を奏でる日本庭園の装飾である。こはぎは、それが何かは知らなかったが、どうやら金属音のように思えたのは、水滴が地下にしたたる音である、ということは理解できた。

「ここに水をかければいいのかな……」

足元の雑草の混じった玉砂利にはご丁寧に「水」と書かれた石がある。ものは試しだ。そばに転がっていた柄杓を拾い、手水鉢に溜まった雨水をすくい上げ、そこに落としてみた。

ばしゃり。水は、石の間を抜けてすぐに地面へとしみこんでいった。こはぎは、すぐにぼろぼろの竹筒の穴に耳を近づけてみる。雫が、見えない地下の空間へとぽたぽたとしたたり落ちていき、先ほどの音色が耳に入ってきた。

かんかん、からんからん……からんころん。

……これだ。この音だ。こはぎは、疑問が解消されてうれしくなった。面白くて何度も何度もばしゃばしゃと柄杓で水をかける。

「ぷっ……ウケる〜！」

こはぎは、墓場の隅で、しゃがみこみながら笑っていた。不謹慎だし、自分でも何がおかしいのか分からなかったが、久しく忘れていた喜びと、そして懐かしさ。生きている実感がなぜかわいたのだ。

「もしかして、おばあちゃんがここに連れてきてくれたのかな」

「小栗堂」というこの場所に導かれたのはきっとそうに違いない。信仰心のカケラも無い自分を、祖母がやさしく諭してくれたのだろう。こはぎは、やっと前向きになれるような気がした。

「ありがとう、おばあちゃん」

さて、戻らないと。あまり長居しているとパパとママに叱られてしまうだろうから。こはぎは立ち上がると、遊びに使った柄杓を手水鉢の所に置こうと腕を伸ばす。

そのときだった。

「――ッ!?」

何か小さなものが、地面からにゅっと飛び出し、こはぎの手首をぴっとかすった。それは、白い小石のような、刃物のようで。その時は分からなかったが、自分の細い手にとても小さな切り傷を作ったのは分かった。

「んっ!!?」

じわっと手首に赤いものが出たので、あわててハンカチで覆う。すると意外なことに血はすぐ止まった。

(傷口から何かが入ってくるような感覚がしたけど、気のせいか……)

笹の葉か何かで切ってしまったのだろうか。そこまで気にすることもなく、こはぎは元来た道を走っていった。坂道を下ると、両親が車の前で心配そうに待っている。

「どこまで行ってたんだ？　帰るぞ？」

「……ないしょ。ママ、除菌シート貸してー？」

その日、家に帰った後、こはぎは高熱を出して寝込んだ。

あの世の存在は分からないが、少なくとも祟りはあるらしい。汗だくでうなされながら、「墓場なんかではしゃぐんじゃなかった」と後悔するのだった。

＊

場面は再び保健室に戻る。

「……じゃあ、アンタがおかしくなったのは、遊行寺でケガしたのがきっかけだって言いたいの？」

「それくらいしか、思い当たる節がないんだよね」

恵美由はそんな程度で「ゾンビ」になるのか、と首をかしげた。仮に彼女の言う事を信じるとして、考えられる可能性は二つだ。

一つは、未知の病原菌によるもの。こはぎの手首の傷から、ウイルスが侵入して、彼女の体に何らかの影響を及ぼした。有名な病気では破傷風などが挙げられる。科学的で合点も行くが、友人が謎の病に侵されているという事実と、場合によっては彼女の返り血を浴びた自分にもこ

れから何かの影響が出るかもしれず、恐ろしい事この上ない。

もう一つは……、まずありえないが、オカルト的な原因。こはぎが一種の呪いにかかってしまったという荒唐無稽なものだ。近ごろ週刊少年誌で呪術を題材にした漫画がヒットして、髪がのびる人形などいわくつきの「呪物」などがサブカルチャー界ではプチブームだという。そうなると本人が主張する通り、ゾンビになろうが幽霊になろうが空を飛んでビームを出そうが、なんでもアリになってしまう。

「ありえない……。いやねーわまじで」

きょとんとしている友人の前で、自分に言い聞かせるように首を横に振る。ガキじゃないんだ、流石に中学二年の自分でもそんなことあるわけないのはわかる。となると、必然的に導き出される仮説は前者になる。さて、どうしたものか……。自分まで医者に行かなくてはならない事態が見えてきて、恵美由は頭が痛くなった。

「やっぱぅち、ゾンビになったのかな？」

恵美由はＳＮＳに「新型株　感染者一号・二号」と顔写真を晒されたりする未来を想像し恐怖していた一方で、当の本人は思いのほかきょとんとしていて腹が立った。

「い……いずれにしても、キーになるのは、アンタの手首を切った『何か』なのは確かでしょうね。それが分かって病院に持っていけば、お医者さんが調べてくれるんじゃない？」

「あー、やっぱエミュー頭いいわぁー」

「……それくらい自分で気が付けよ。ガラス片とか石とか、何でケガしたのか、覚えてない？」

「実はあの後さ、家に帰ったら『それじゃないかな』ってモノが喪服のポケットに入ってたんだよね」

「……ポケット？」

「うん、上着の中に飛び込んできたみたいで。今日、エミューに相談したくて瓶に入れて持って来たの」

「じゃあ、話しは早いじゃない！　見せてよ‼」

こはぎは、ごそごそと膝に置いたスクールバックを漁り始める。善は急げだ。保健室の先生に早退を告げて、二人で病院に行こう！

「じつは、これなんだけど……。一本だけ入ってたんだよね」

ガラスの中でカラカラと揺れる黄白色の物体が目の前に突き出された。恵美由はそれを受け取り、手の中でどれどれ……と凝視する。いびつだけど、確かに鋭利な部分があって、触れれば切り傷になりそうな物体が転がっていた。でもどこかで見た事のある形だな……。すごく身近な感じ……。

「……は？」

口元がゆるみ、間抜けな音が抜けて行く。それは、あまりに身近すぎた。

「そう、歯」

黄色っぽい欠片がエナメル質の塊だと認識した瞬間、思わず、小瓶ごと布団の上に投げつけた。

「はあああああ‼　ナニ考えてんだてめぇ‼‼」

「ビンが割れるからやめてよ」

「それ、人間の……っ！　人間の歯……ッ‼」

口の中で舌を動かすと、硬いモノが。同じ形のものが自分にもある。尖った犬歯と、すり鉢状の奥歯……動物のものでもなく、まぎれもないニンゲンの一部だ。

「あそこは古いお墓だったから、だれかのものだと思ぅんだよね」
こはぎは死体を大切なもののように拾い上げ、眺めていた。正直キショかった。
アタシの友達は、一体、どうしてしまったんだ……！　恵美由はぺたんと床にへたりこむ。全身に鳥肌が立ち、恐怖を抑えるので必死だった。
「あれ……歯が二本に増えてる」
……これはウイルスなどではないんじゃないか。信じたくはなかったが、これは病院ではどうにもならない、自分の中にあるはずのない霊感のようなものの警告を感じる。恵美由は朝のホームルームでこの女に声をかけたことを死ぬほど後悔した。
「こはぎ……、一緒にお祓いに行こう」
生者の腰の抜けた声が可笑しかったのか、「それ」は、からからとあざ笑うかのように小瓶の中で揺れていた。

第三段　大庭神社

都合の良すぎる話ではあるが、幸いにして、恵美由にはその手のつてがあった。

「知り合いにさ、神社やってる家があるんだよね」

思い出すのも恥ずかしい、人見知りで陰キャだった小学生時代のことだ。

どういう経緯で知り合ったのかまでは覚えていないが、共働きの両親が幼い恵美由に寂しい思いをさせないようにと、仕事で帰りが遅くなる日はその家に頼んで預かってもらっていた。

家には、大学生の娘さんがいた。両親の帰りが遅い日には一緒におやつに柏餅や、のし紙に包装されたお饅頭を食べたり、隣接する神社の境内の梵鐘を鳴らしたりして遊んでもらっていたりしたものだ。

あの人ならきっと目の前で死体の一部を愛でている狂ったゾンビ女を更生させるヒントをもらえるのではないか？　少なくとも、自分の持てるコネクションとしてはこれ以上のものはないのだった。

「でも、神社っしょ？　ぅちがコレ拾ったのはお寺だょ？」
「そりゃ違うけど『神仏シューゴー』だっけ？　似たようなもんでしょ？　……おい、なんで目を逸らす」
「そ……そこまでしなくてもさ。と……とりあえず『これ』をお寺に返せば何か変わるかもしれないし」
目の前の女は、予防注射を嫌がる駄々っ子のように小瓶を大事そうに抱えながらもじもじとしはじめた。
「いくらなんでもまさかエミューがそんな人と知り合いとは思わなかったし……」
このメンヘラギャルゾンビ、表情一つ変えず自分の手首を掻っ切れるにも関わらず、「お祓い」されることが怖いらしい。恵美由はお前のビジュアルの方が怖えよ、と言ってやりたかったが何とかこらえる。
「遊行寺に行って『墓場に落ちてる骨持ってきちゃいました』なんて言えるの？　警察沙汰よ？」
こはぎの脳内テレビに、有名人の遺骨を墓地から盗んで逮捕された人間のニュースが映し出される。あれはファンの過ぎた愛からの暴走だけど、自分の場合は不可抗力だ。いや、結果的

にどっちも頭おかしい人には変わりないけど。

「いまどき大きなお寺なら監視カメラだってあるしね。そもそも、鏡見てみ。アンタのファッションは一度見たら忘れないと思うよ」

「確かに……。絶対あの坊さん、うちの顔絶対覚えてるし……」

さすがに九〇年代のシブヤから飛び出してきたようなコギャルを数週間で忘れるような僧侶はいないだろう。

……しかし困った。最初は夜の寺に忍び込んで歯を置いてこようかとも思っていたのだが、恵美由の言うとおり監視カメラやホームセキュリティも契約しているだろう。それこそ補導こそされようものなら、両親やあの世の祖父母の顔までつぶしてしまうのだ。

「どっちにしても、自分が『ゾンビ』だって言ったのはこはぎだよ。アタシはそーゆーオカルト的な知識は無いし。予備知識も無しにインチキ霊能力者に引っかかって怪しい壺を買わされるよりはずっとマシだと思うけど？」

「ん。……そーだね」

こはぎは、カラカラと音を立てる小瓶を鞄に戻す。同じくして、授業開始を告げるチャイム

が鳴った。

「やっぱ、戻らないと！」

コイツの周囲は時間が止まってるんじゃないか？　わずか十分の休憩時間とは思えないほど、会話が生真く濃密すぎた。恵美由はあわててカーテンに囲われた空間から飛び出す。

「エミュー。とりあえず、ぅち。今日は早退するわ」

「そうしな！　あとでＤＭ送る！」

ぴしゃりと、保健室の扉が閉じられ、パタパタと上履きが廊下をたたく音が遠くに消えて行った。授業は始まっていて、独り遅れて教室に飛び込むことになるだろう。あいつ、きっと恥かくだろうな……。

「……ごめん」

白い布に囲われた結界の中で、こはぎはぼそりとつぶやいた。

＊

放課後、待ち合わせた二人は、住宅街から少し離れた所にある田んぼのど真ん中をママチャリで走っていた。恵美由が連絡をつけてくれて、さっそく神社で相談に乗ってもらう事になったのだ。

「あの後、お風呂に入ったら少し体が楽になったょ」

家に帰った時、祖母が生前お土産でくれた温泉のもとがあるのを思い出した。なんとなくそれを入れて入浴したら、不思議とだるさがすっと引いた。

「ふーん。まぁ、その場でお祓いできるかもしれないし、清潔にはしないとね」

二人とも神社の作法は分からなかったが、血生臭い体のまま行くわけにはいかなかったので、念入りに体を清めてシャンプーの香りをまとっていた。

「随分うまく段取りつけてくれたみたいだけど、どう言って相談したの？」

「さすがにゾンビなんて言えないから、ぼかして『厄年にやるような祈祷ってできる？』って訊いてみた。久しぶりに電話したけどおばさん喜んでてすぐオッケーくれたわ。祈祷の依頼もめっきり減ってるみたいだから」

なるほど、厄落としか。厄年のお祓いくらいならどこの神社でもできそうだ。ただ、「歯」に

ついてはその場で見せてどんな事になるかは想像できないけど……。

「まぁ、すっかり疎遠になってたから、いきなり電話してどういう反応が来るか不安だったけどね」

「小さい頃預かってもらうくらい親切にしてもらってたんっしょ？　何で距離置いたの？」

「だってあの姉ちゃんダサいんだもん。他の年ごろの女と違って全然オシャレしないし、田舎のおばあちゃんの家にいるみたいだったから。きっとあのまま世話になってたらクッソダサい陰キャ女子中学生になってたわ」

「おばあちゃん……」

「あっ……。例えだからね？　だってこんな里山で日々過ごしてたらそう感じるでしょ？」

「確かに……。……ここって藤沢市なんだよね」

こはぎはペダルをこぎながら、祖父母の実家のある田舎の景色を思い出していた。

五月の田植えを控え、広大な農地にどばどばと水が引き込まれている。新しい季節を迎え、久しぶりにのどを潤した水田たちに空の光が反射して、碧く輝きはじめる。ちょうど二人はその中心に引かれた農道を走っている。

「なんだか、マス目で区切られた海の上にいるみたい」

自分の住む地域にこんな自然があったとは。この街に引っ越してきて数年になるが、日常生活が住宅街の中で完結していて、郊外に関心が無かったのだろう。

「じゃあ、泳いでみ。今なら人いないしプライベートビーチやぞ？」

「やだよ。泥だらけになるじゃん」

「同じ藤沢でも、アタシらにあるのは泥の海。ほんっと、『湘南ライフタウン』とかいう大層な名前の街なくせに、江の島のイメージとギャップ大きすぎてやんなっちゃう」

「ライフタウンからだと海に行くのにもバスと電車使うもんね」

「あ～、今年は海水浴客来るのかな？　逆ナンしに行きてぇ～」

「出ーたょ。エミューの口だけビッチ」

「そういうお前は何人も男食ったんだろ～？」

「食わねーし。ギャルとビッチを混同すんなしぃ」

こはぎたちは「湘南ライフタウン」という地域に住んでいる。昭和の頃に湘南大庭地域から一帯にかけ、山を開いて整備されたニュータウンだ。映画やアニメなどの作品の中で多く登場

する「湘南藤沢」といえば、江の島が常にセットになった海沿いの観光都市のイメージが強いが、それはあくまでも南部の話だ。藤沢市そのものは南北に長い形をしている。内陸には自動車工場などの産業地帯や、現在こはぎたちがいる舟地蔵の遊水地のように自然や里山の保護を兼ねた田園地域も分布している。近年でこそ「湘南の玄関口」を自負して駅前の建築ラッシュに沸くこの街であるが、ある意味、ここが本来あったはずの「わが住む里」藤沢の景色だろう。

「……ん？」

ぴ～ひょろろ。

くだらない会話をしながら自転車を走らせているうちに、川向こうの小山の方から楽器の音色が聞こえてきた。「エミュー、誰かが笛の練習をしているみたい」

「え？　……あぁホントだ。おはぎ、耳いいな」

大庭地域を流れる引地川の橋を渡り、音色のする方向へ進んでいくと、山のふもとに古いコンクリート製の鳥居が見えてきた。隣には、文字の書かれたぼろぼろの石柱が立っている。

「郷社　大庭神社」……件の神社の名前である。

その参道の石畳の上に、着物姿の女性の後ろ姿が見えた。こはぎには、白と浅葱色の袴を着

た等身大の市松人形がそこにいるように思えた。いよいよ、この土地の異界にやってきたのだ。
こはぎはつばを飲み込む。
「あ、いたいた。おーい、イナホお姉ちゃーん！」
恵美由に名前を呼ばれた女性は手に持った横笛を懐に仕舞い、こちらに振り向く。すると、表情をこわばらせ、急いでマスクをつけた。
「久しぶりー！　三年ぶりくらい？」
自転車から降り、テンション上げ上げで近づく恵美由に一言。
「……どちら様ですか？」
「……はにゃ？」
予想外の反応に恵美由は首をかしげた。
こはぎも「アポを取って来たのに何で？」と思ったが、それほど二人の姿がこの場所では奇異だったのだ。
「ぅち、エミューの中学デビュー前の姿は知らないけどさ。……ちゃんと名乗った方が良いんじゃね？」

*

「神職のくせに人を忘れるなんて信じらんない！　昔面倒見てもらってた恵美由だよ！」
「失礼。マスク越しな上に、あまりに装いが変わりすぎてしまったので」
三人は鳥居をくぐり、山上の境内へと続く、長いコンクリート製の階段を上っていた。先導する「イナホ」という女性はよほど恵美由の姿にギャップがあるらしく、彼女がマスクを外してもなお、昔と変わってしまった事に驚いていた。
「昔はパーマのかかった短い黒髪で、眼鏡をかけていたじゃないですか。その姿を想像して鳥居の下で待っていたら、実際に来たのは〇ービー人形みたいな姦しい魑魅魍魎だったので」
こはぎは自分の前を息を切らして上る恵美由の過去のビジュアルに驚きつつ、「こいつ〇ービー人形というよりは、男受けを狙いすぎてもはや〇ブドールなんだよな」と心の中で思った。
「チミモーリョー言うなし。昔に生きてるお姉ちゃんと違ってアタシは過去を捨てたの！」
「お洒落に目覚めるのは良いですが、それにしても変わりすぎであります。てっきり、狐に化かされたのかと思いましたよ」

「いくらこんな田舎でもハクビシンかアライグマくらいしかいねーよ！　……おっとと！」
恵美由はよろけて錆びた鉄製の手すりにつかまる。頭上には大きな木が覆い、入ってくる日の光は少ない。じめじめした香りがして、敷石には苔がむしている。
「階段はすべりやすくなってるので、足元に気を付けて」
ぷわ～ん。
「うわっ虫‼　蚊が寄ってきた！」
啓蟄はとうに過ぎ、うす暗い緑のトンネルの中は、虫たちの楽園であった。
「エミューのコロン、バニラくさい香りだから、蜂とか寄ってきそう」
自分たちが望んでこの場所に来たわけだが、明らかにギャルのいるべき空間ではない。大昔に流行った「森ガール」のコーデならまだ様になるだろうか？　いや、これほどの悪路では、もはや登山女子か。こはぎはルーズソックスについた蜘蛛の巣をはらいながら、もう少し動きやすいファッションをチョイスすべきだったと後悔した。
「あーもう。相っ変わらずこの参道、キッツいわー……」
百八段あるといわれる階段を登りきると、恵美由はへろへろになっていた。

「エミュー、汗すごくね？」
「やっぱ、メイク崩れる！」
巫女さんは「この階段は地域の野球クラブがトレーニングに使うくらいですからねぇ」とつぶやくと、こはぎを横目に見る。
「ところで、貴方は大丈夫なのですね。マスクをしたままだというのに全く息を切らしていない」
「……？」
猫のような眼光でイナホと名乗る人物は自分の姿を見分していた。言われてみれば、息が全くあがっていない。部活動はしていないので、運動部のような脚力があるわけではないのだが。
「……外しても良いのですよ？」
「ん、あぁ。付けっぱなしだったわ」
「……あちらが、私の家が管理している大庭神社です」
白い袖が開いた方を見ると、もう何段か上がったうえに、小さな社が見えた。境内はあまり人も来ないのだろうか、手水鉢には水は無く、古い石の鳥居が崩れて路傍に散乱していて、やや荒れた感じを受ける。

「そこの鳥居、崩れてるけど。いいんですか？」
「ああそれ。関東大震災の時に崩れた鳥居だそうです。震災遺構としてそのままにしています」
「へー……」
（それっていつのことだっけ……？）
関東大震災が発生したのは一九二三年の九月。ちょうど百年間そのままにされているのだった。
疑問符を浮かべたまま、そのまま拝殿の建つ境内に進もうとすると、イナホは静かに立ち止まった。
「もう少し、早く気が付くべきでした」
「……？」
「ねーちゃん、神社に行くんじゃないの？」
「拝殿で簡単なお祓いでもしようと思ってましたが……。今日はやめておきましょう。すぐ先に実家がありますから、そちらで相談に乗ります」
「えー、まだ歩くのかよー」

恵美由が便所座りをして文句を言う隣で、こはぎは目の前の巫女さんは何かを感じ取ったに違いないと気づいた。女性は再びマスクを着けると、背を向けて一言つぶやいた。

「神様の住処に、『ケガレ』を持ち込むわけにはいきませんから」